

第24期第2回 札幌市スポーツ推進審議会 議 事 録（概要版）

日 時：平成25年4月24日（水）午後3時開会

場 所：札幌市役所本庁舎 8階 1号会議室

1 開 会

2 あいさつ

3 議 事

（1）議題

○事務局（石川企画事業課長）

（付議議案の趣旨説明）

○霜觸会長

ただ今提案された内容について、委員のみなさまからご質問等はないか。

○山本委員

1点確認したい。この計画は札幌市まちづくり戦略ビジョンとのつながりがあるとのことだが、計画が妥当であるかどうかを評価するのに、まちづくり戦略ビジョンの、少なくとも概要が示されていると議論がしやすい。

○事務局（石川企画事業課長）

まちづくり戦略ビジョンは、これまでの基本構想に代わり、今後10年間のまちづくりの基本的な指針となるものとして、昨年度の3月に定めたところである。

このまちづくり戦略ビジョンは、ビジョン編と戦略編の2部構成となっており、ビジョン編では札幌の将来のあるべき姿を定め、戦略編は策定途中であるが、行政が集中的に実施する事業について盛り込んでいる。

○事務局（西田部長）

本編のP7をご覧いただきたい。

2行目にあるとおり、基本構想及び長期総合計画に代わる基本的な指針として、3月に札幌市まちづくり戦略ビジョン・ビジョン編という形で、議会の議決を経て策定された。

まちづくり戦略ビジョンは全7章となっており、1～5章までは3月に議決をされ、6・7章はこの秋ぐらいまでに策定される予定である。

目指すべき都市像として二つ掲げており、「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」、「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」という都市像のもとに、7つの分野と24の基本目標を掲げている。この7つの分野が「地域」「経済」

「子ども・若者」「安全・安心」「環境」「文化」「都市空間」であり、このうち「文化」の中で「スポーツによる創造性の育み」が出てくる。現在、7つの分野に係る施策を庁内で議論している段階である。

従って、まだ全体像が見えない中ではあるが、このまちづくり戦略ビジョンが秋までに策定されるスケジュールとなっていることから、スポーツ推進計画についても、その議論内容を踏まえて修正を図りながら、秋までに公表したいと考えている。

○事務局（二木局長）

少なくとも、ビジョン編は完成しているので、資料は後日お届けする。

今、戦略編を策定中なので、戦略編とスポーツ推進計画の整合性をとる作業を、並行して行うことになると考えている。

○山本委員

単純に「文化芸術・スポーツによる創造性の育み」にぶら下げるということではなく、全体の整合性が必要だと思う。

「子ども・若者」や「安全・安心」、もちろん「経済」とスポーツもリンクする。そういった札幌らしさを打ち出しているまちづくり戦略ビジョンとの整合性がないのは、非常にまずいという気がする。

札幌らしいスポーツ振興を考える時に、まちづくり戦略ビジョンでどんなものが目玉として打ち出されているのか。札幌と言うと、どうしても「自然が豊かである」とか「ウインタースポーツ」に走りがちとなるが、クリエイティブな、新しい創造的な産業のベース基地となっている。

新しいIT関係の企業を誘致するという文脈とあつたとして、スポーツとどうつながるのか。例えば、早稲田のスポーツ研究所がやっている「e-sports」のように、インターネットを通じた新しい分野との連携を図り、世界に先んじて、日本で初めて「e-sports」の拠点にする、といった戦略が見えてくるのかどうか。

そういったところが分らないと、なんとなく北海道は自然が豊かだ、札幌はこうだ、そしてスポーツ基本法がこうなっているから、こうするというように、なんとなく総花的なものになっていく。

例えばもう一つ、今回、新しい市電ができて、ループ化するという話がある。街なかから車を排除しようという時に、そこで自転車やウォーキングのコースを作って、健康づくりや、新たな札幌らしいまちづくりと連動したスポーツ振興をやっていこうとか、そういったものが見えないと、なかなか議論しづらい。

なんとなく総花的に、スポーツ基本法をそのまま縮小したように、「いつでも」「どこでも」「だれでも」という、従来の生涯スポーツをそのまま具体化するというようなニュアンスに見えてしまう。

街なかから車を排除した上で、ランニングコースと自転車コースができ、冬にな

れば公園が全部ウォーキング、ジョギングやマウンテンバイクのコースで繋がるのだとか、そういう札幌らしいまちづくりの取組とスポーツの振興のリンクについて、もっと議論できる気がするが、そこがまだ見えない中で、スポーツがまちづくり戦略ビジョンの「文化・スポーツ」にぶら下がっていると言われても、ちょっと違うのかなと思う。

○霜觸会長

そこにぶら下がっているのではなく、ビジョン全体の中に入る形となるのであるう。

○事務局（二木局長）

まちづくり戦略ビジョンとは、ある程度、作業を並行してやっているの、この計画を作る上で、全体的な整合性は取れた形にはなっている。

ただ、具体的に新しいことをどう展開するかは、これからの議論になってくる。特に経済の活性化につながるスポーツとは何か、あり方とは何かといった部分は、まだ薄いので、そのあたりは新たな発想の中でアイデアを出していかなくてはならないと思う。その意味では、これからの作業が必要と考える。

○霜觸会長

今のことを踏まえながら、議論を進めてまいりたい。

今回まとめていただいた中で、まず、最初に「基本理念」について議論をスタートしてまいりたい。意見はいかがか。

○山本委員

当然、札幌市のスポーツ推進計画は、スポーツ基本法、それからスポーツ基本計画との連動性ということになるが、なんとなく欠けている気がする部分が1か所ある。

スポーツ立国戦略でもトップアスリートの養成があって、スポーツ基本計画の中にも、国際競争力とかトップアスリートの育成が盛り込まれている。この後に出てくる好循環の話もそうだが、アスリートが育たないと、スポーツを見るという文化は育たない。

もちろん日ハムさんやコンサドーレさんもいる。そちらの山田さんもいらっしゃるように、例えば、高梨沙羅ちゃんのように、北海道民のトップアスリートが育つということがあって、初めて、応援したい、見に行きたいと思う。また、そのことによってお金が動く。

そういう構造がある時に、この計画の中に「トップアスリートを育てる」という文面が見えない。トップアスリートと交流するという文面はあっても、トップアスリートを自前で作ろう、札幌市民の中からカーリングの世界チャンピオンを作ろう、ジャンプ台があるのだからスキージャンプをもっと普及振興しよう、札幌でしか育てられないトップアスリートを養成します、という項目がない。

トップアスリートがやがて地域に戻り、好循環を生み出し、地域のスポーツの活性化に貢献する。または、トップアスリートが活躍することによって観戦文化が醸成され、大会の招致や、それによる経済波及効果が生まれる、といったリンクが必要だと思うが、トップアスリートを育てるという文面が、この計画には抜け落ちている気がする。

もし、構造的に、スポーツ基本法やスポーツ基本計画の文脈、スポーツ立国戦略を踏まえるのなら、なんらかの形でトップアスリートや選手の育成環境を整備するということがあってもよいという気がするが、いかがか。

○霜觸会長

他の委員のみなさんはいかがか。

○晴山副会長

山本先生が仰ったことと同感である。「今までなかった札幌の姿」がイメージできる、というところが不足していると思う。今あるものに頼っている狭苦しさや、新鮮さを描けない寂しさを感じる。

また、トップのことと底辺のことについて、両方見ていかないといけないと思う。キャッチボールもできない、ボール遊びもできない児童公園ばかり、ということが、アンケート調査結果に見え隠れしているが、児童公園の問題はこのまま放っておいていいのか。何十年と使われない児童公園になっている。

子育て中の母親が公園デビューのようなことで、一時期使われるだけで、それも継続しない。そんなものを放ったらかしにしているのか。

それから、アンケートでたくさん希望が出ていた「ウォーキング、散歩」は、している人も多いし、これからしたい種目としても断突で多いのに、歩きたいと思う場所があるだろうか。そういったものを設計していくことも大事になってくると思う。

○霜觸会長

他の委員のみなさんはいかがか。

これだけの環境が整っていて、施策が準備されている中で、自治基本条例ができたこともあり、是非、市民自らがやる、という部分を訴えるものが欲しい。

行政なので、環境を整える等の条件整備をすることもそうなのだが、市民自らが動いてください、やってくださいという訴えかけが欲しいと思う。どういう風にそれをアピールしていくか、盛り込んで振興していくか、というところを考える必要があると思う。

ウインタースポーツも含め、これだけ条件があるのだから、自らがやる、というところに訴えるパワーが欲しいと感じる。

○堀内委員

仰るとおり、スポーツに対するインパクトが薄く、地域性が欠けていると思う。

行政に与えられているスポーツは、日本どこでも同じである。従来のスポーツの概念だけではなく、スポーツ・レクリエーションを兼ねて、地域性をどうやっていかしていくか、人材を吸い上げていくかという問題が、今後、市民の意識を向上させることに繋がっていくと感じる。

○晴山副会長

P 27の図で、「みる・知る」「する」「支える」が同じ分量として描かれているように見えるが、「する」部分をもっと充実しないといけないということを感じる。

行政が準備をするだけとなると、市民は「おんぶにだっこ」となり、スポーツをする人を増やしていくことにはならない。これは、考え方を変えていかなければならないと思う。

例えば、誰かが計画を立ててきたら、行政がそれを応援する。また、計画を立てたくなるような施策を行政が仕掛けていくことで、実現していくと思う。

○霜觸会長

あまり計画に書き込みすぎると、全て行政がやらなくてはならない。これは無理な話で、市民自らがやる、ということを引き出していくものがあるはずである。その辺を訴えていくことが必要と感じる。

○堀内委員

先日、痴ほう症とスポーツに関する問題について、テレビ番組を見たが、人間は10分くらい体を動かすと、認知症はある程度止まるということである。

65歳以上の高齢者になると、動く体勢が取れず、認知症になるという認識が薄くなる。そこで自ら体を動かす方策があるということであった。

○霜觸会長

スポーツをしたくなるように仕掛けるということが大事になってくる。

○堀内委員

スポーツと健康という観点でいけば、かなり進んでいくのではないかなと思う。

○霜觸会長

基本理念で「スポーツ元気都市さっぽろ」という標語があるが、街中にステッカーを貼り出すなど、市民の頭に染み込ませるくらいのことをすると、スポーツをしなくてはいけない、と思うようになるのではないかなと思う。極端な話ではあるが、それくらいのことをして、市民の力を引きだしていくことが必要と思う。ヒアルロン酸等の健康食品にばかり頼らず、自らが動いてもらわなくてはいけないと思う。

よくできた計画ではあると思うが、これを出してしまうことで、行政はこんなにやってくれるのか、という思いを抱いてほしくないと思う。

○晴山副会長

P 51の概念図は良くまとまっているが、指導者を養成するということも必要で

はないかと感じる。これまでは、専門的な競技スポーツに関して指導者を送る、といったものであったが、新しくこういう指導者像をつくっていくということを描くことが必要。

幼児は児童とは全く違う特質を持っていることから、幼児を育てる人、児童を育てる人、成人に関わる人など。高齢の方にとっては、若い人に指導されるよりも、同じ世代の指導してもらおうと、指導のテンポや辛い部分が良く分かる。それぞれの年代や障がいに応じた指導者を、どこかで養成していかなないと、計画は絵に描いた餅になりかねない。

○霜觸会長

基本理念については、みなさん大体よろしいか。

次に、各目標、施策に入っていきたい。

先ほど山本先生が仰った、アスリートを育てる環境は大事なところで、是非、その視点を入れて頂きたい。それから指導者像の在り方という話も出た。その他、何かご意見があればどうぞ。

○山本委員

構造的な部分で、具体化にあたって整理したい部分がある。

例えば、生涯スポーツという枠組で、「全ての人が生まれてから死ぬまでスポーツに関わり続けられる社会環境を整備する」とした時に、キーワードとして「いつでも」「どこでも」「だれでも」があって、この「だれでも」の中には、スポーツとの関わりの多様性を組み込むことが必要。

ここには嗜好性も含まれ、例えば、健康のためにやる、楽しいからやるといった目的、トップレベルやビギナーといったレベルの差。晴山先生が仰ったように、トップアスリートだけということではなく、「全ての」に含まれるのにトップアスリートを入れないのもおかしい。「全ての」、「だれでも」というからには、どんな嗜好性であれ、オリンピックで勝ちたいという嗜好性であれ、今日隣の人とキャッチボールをするという嗜好性であれ、平等にスポーツができるという環境づくりだと思う。

もちろん目的も違う。健康のためにジョギングをする、記録のためにジョギングをする、どちらもありだと思うが、その「だれもが」というところを、もう一度しっかり整理することが、環境整備には重要になる。もちろんその中には、年齢や性別、「見る」という人もいれば、「支えたい」という人もいる。人そのものの多様性を、もう一度整理してほしい。

そして、人が関わってくることは「主体性」がすごく重要なキーワードとなり、自らが環境を整備するということを、市がどれくらいサポートするのか、という構造に組み替えていくことが重要である。計画で出ていることは素晴らしいことで、全部その通りだと思うが、その交通整理が必要である。

ちょっと気になるのは、基本理念に行く前に、P 7にスポーツに対する新たな視点として、障がいのある人のスポーツ活動の促進とあるが、これはちっとも新しいことではなくて、「だれもが」と標榜しているのであれば、障がいの有無に関わらずということは「だれもが」に入っていなければおかしい。「だれもが」と言っているにも関わらず、まだバリアフリーがうまくいっていないのであれば、「だれもが」というところに、当然、障がいのある人のスポーツ活動の促進が入ってくるべきことで、ちっとも目新しいことではない。

「だれもが」の中には、「やる」「みる」「支える」、さらには「やる」にしてもどういう目的でやるのか、どういうレベルでやるのか、または年齢、性別、障がいの有無に関わらず、全ての人ができるようになることを考えた時の環境整備と、それを主体的に実現するための仕組みづくり、という構造に作り直していくと、みなさん、すっとんと落ちるのかなと思う。

それぞれのパーツはすべて書いてあるような気がする。すごく丁寧に書いてあって、全部網羅されている。ただ、順番や位置取りがバラバラな構造になっている。

折角、こんな立派なものを作っていただいたので、絵に描いた餅にならないように、具体的な戦略を立てていく上でも、整合性の見えやすい形に作り直していただくと、次に、具体的にここを戦略的に重点ポイントにしよう、なんて意見も出てくるのかなという気がする。

○晴山副会長

「いきがい」や「やりがい」というところで、「やる側」のことを言っているのか、「支える側」のことを言っているのか。その辺をもっと厚く書くと良いと思う。

最近、人のために何かをすることについて、生きがいを感じるものだと改めて感じているが、「やる側」でありながら「支える側」でもあるという複層した構造というものを表すことができないかと感じる。一旦、バラバラにしてみると、組み立てても違ってくると思う。

○霜觸会長

民間がやることもあると思う。日本ハムファイターズでは、野球だけをしているのではなく、いろんなイベントを展開している。コンサドーレも同様。民間のアスレチッククラブも、結構な数がある。

そういったところに対する支援も、重要なスポーツの環境づくりであり、まさにスポーツに引き込んでいく動機づくりになってくる。そこをもう少し書いても良いと思う。

民間でやっていることも大事にし、支援、協力、バックアップするということ、行政はそういう部分も大事にします、という部分があっても良いと思う。

○晴山副会長

前の会議の時に企業のことを話したが、企業に協力していただくことが重要。

例えば、スポーツをすることでできないという人について、企業に就職した時に、アンケートで女性はどれくらいの人就業しているのか、というところまで見えると分かりやすかったかと思うが、この頃は保育園の様子を見ても、恐らく働いている人が相当増えていると思う。そういう中でスポーツをする人が少ないというのは、そこがネックになっているということ。そこが改善されないと、今度目標を立てたものの、達成できないのではないかという気がする。

例えば、1か月、1週間に何時間運動した人は申し出るといったことを企業が行い、そしてその人たちに、何らかの、報酬でなくとも、何かやりがいのあるようなことを用意すること。行政が決めなくても企業が主体的にやってくれるような働きかけというものは、行政ができるのではないか。

そして、そこにかける分で、他に行政でなくては出来ないところに集中してかけていけるのではないか。住み分けをしてみると良いと思う。

それと、地域のことは、地域のスポーツ推進委員や体育振興会が、それぞれにユニークなことを考え、それをプレゼンしたりすることをバックアップしていき、お互いが成長していけるような仕掛けを行政がしていくことを、もうちょっと具体的に書いてみる必要がある。

○山本委員

全く賛成である。今のところを構造的に組み替えるひとつの枠組みとして、環境づくりをするというとき、大きく分けてハードウェアとソフトウェアがある。

ハードウェアの部分は大体、施設、設備ということになるが、ソフトウェアの部分は、今言ったような仕組み、仕掛け、システム、それから人材となる。先ほど指導者の養成という話もあったが、環境整備の中に人材の育成というのがあり、主体的に「いつでも」「どこでも」「だれでも」という全体像を構築していく上で、どういう施設が必要で、どういうシステムや仕掛けが必要で、どういう人材がそこに関わっていくかというアウトラインを描いて、市がどこにイニシアティブをとるのかということが必要である。

また、施設については、市民が主体的にという訳にはいかないので、市がイニシアティブを取らなければいけない部分。もちろん、市民の声を聴いてとなるが、システムや人材のところを書いていく時に、「いつでも」「どこでも」「だれでも」というものを保障するための施設、システムや人材、その辺を構造的に整理すると、分かりやすいのかなという気がする。

晴山先生が仰ったように、指導者の人材もそうだが、仕掛けの部分を整理していくと良いと思う。書いてはあるのだが、入れ替えてみる。

○霜觸会長

作ります、させます、用意しますと書くと、行政が全部やらなくてはならなくなる。そうではなく、市民自らやるための仕掛けづくりをどうするか、ということが

大事になるのだと思う。

○晴山副会長

バラバラにやっているものを集約して、ここにいけば全部分かるという情報の集中化と、こういうことについてはそこに行けば分かるということがマップになっていたり、こちらで分かるというようなところ、市民がスポーツに関して知りたいことは全部、何でも分かる、というようなところが必要かと思う。

○霜觸会長

民間にやってもらうこと、競技団体にやってもらうこと、そういったところの表現が必要だと思う。この計画は、見ていて隙がないくらい完璧だと思うが、これをするのは大変だという印象である。

それから、子どもの運動能力や体力づくりというのは、家庭か学校である。教育委員会で、子ども体力作りとかスポーツをどう教えていくか、当然、体系の中に組んでいると思う。それはそれで任せるとしても構わないと思う。

まちづくり戦略ビジョンの中でも整理をするのでしょうから、教育委員会でやってくださいということになる。子どもの運動能力の向上は学校教育の分野、家庭教育の分野である。ここで、スポーツ少年団などの問題を全て解決できる話ではないと思う。

何万という人数がいるわけであり、そこは学校に任せ、学校部活動にしっかりやってもらうこと。こちら側としては、何らかの協力をするということの良いと思う。

佐藤先生としてはいかがか。

○佐藤委員

学校現場としては、指導者の面も含めて、危機的な状況は一向に改善されていない。運動系部活動をやりたがっている子供たちの願いを、何とか叶えることに汲々としている。教えようにも教えることのできない、専門家でない教員が、ただ付いているだけの現状であるから、先ほどのトップアスリート云々という部分は、完全に民間のクラブチームにお願いしていくしかないのだろう。

一番気になっているのは、先程から仕掛けという話が出ているが、学校現場で子供たちとその背後にいる保護者に一番接している関係から見て、そういうものに目を向けない保護者というのは非常に多い。教育にすら目を向けない保護者もたくさんいる中で、さらにスポーツとなった時に、もっと少なくなってしまうのが現場の実情である。

理念を札幌市民全員、一人一人に伝えていこうとしたら、相当の、それこそ一家に1ステッカーを配るくらいの気持ちを持たないと、その理念は伝わっていかないのだろう、というのが現場の実情である。

○霜觸会長

こちら側の、スポーツを振興していこうという思想が含まれることで、学校側も

変わっていくと思う。まちづくり戦略ビジョンでも検討するのであろうから、そこでの整理だと思う。

○晴山副会長

それぞれがバラバラでやっている。

例えばスポーツボランティアにしても、急に大人になってからボランティアを、といっても無理なので、ボランティアが育つように、学校でそういう教育をしてくださいと頼むことが必要。

例えば、私が関わっている小学校でも、これまで5・6年生が体育館を使っている時に1・2年生は入れなかったが、取組として、合同体育を実施してみることになった。

上級生が1年生を面倒みることによって、とても生きがいを感じたり、楽しみができたりする。逆に1年生も、楽しい遊びの場を提供してもらった気持ちが芽生える。そういうものが、将来、ボランティアや、体を動かすことは楽しいという視点を広げていくことに繋がる、

この基本理念を挙げて、やる、だけでは足りなくて、学校にも発信して、そういうものを心掛けてほしいということを要望することなどで、細かいところまで広がっていくのかなと思う。

○霜觸会長

ボランティアについては、戦略ビジョンの中でも語られると思うが、市民全体にボランティア活動を振興していく中で、スポーツはその一部だと思う。市全体でボランティアをどう育てるのかという問題の中で、整理をしてもらう必要があると思う。そこでスポーツにも恩恵が出てくるということを期待する。

私が体育協会にいと、学校が頼りである。学校部活動で生徒がどれだけ伸びてくれるか。また、そこで指導に携わる先生たちが、競技団体の役員になってくれる。ベースが学校であるため、競技団体も学校の現状を心配している。

そういう意味で必ず、連携、関連があることから、ここで書く、書かないは別として、学校部活動もきちんとしていかないと、競技団体も活性化していかないと側面もある。

○晴山副会長

山田さんの活動にとって、社会人と子ども達のつながり、ボランティア精神が支えになっており、あれだけの少女が育ってきているのだと感じるが、いがか。

○山田委員

私も「ようこそ！ユキセン」という、学校に行って授業をするということもさせていただいたが、もちろん私はそういうことが好きで、将来子どもたちに指導したいという思いがあるので、非常に勉強になって良かった。

しかし、強くなってオリンピックに出場している選手や有名な選手を、還元して

いきたいのであれば、それ以前に、何か、彼女達や彼等に、モチベーションになるものを先に提供をしておき、それからお手伝いをお願いする仕組みだったら良いと思う。トップ選手になるまでの間、プロではない選手というのは、苦勞をずっと続けてきている。そこで尚且つ、ボランティアみたいなものでお願いします、と言われても、やはり、正直納得のいかない選手、断る選手もいるであろう。

お金でのバックアップではなくても、サポートをしてくれるような体制があれば、札幌市に恩返ししようという気持ちに、スムーズになるのではないかと思います。

○晴山副会長

名刺を作ってくれるとか。

○山田委員

本当にそれだけでも。

○晴山副会長

小さなことでも何かをもらった、だから何かを返したい、そういった関係で育っていくのだらうと思う。

○山本委員

山田さんが言ってくださったことを確認しておきたいのだが、P2でも、国のスポーツ政策は、スポーツ実施による健康の増進や体力の向上だけではなく、地域における交流の促進やスポーツ界の好循環、という文言を書いている以上、スポーツ立国戦略の3番目のポイントで、スポーツ界の好循環を推進するということがあり、その延長線上にスポーツ基本法やスポーツ基本計画がある以上、やはり、今のよう、有名になった人に手伝ってもらっただけではなくて、その下支えをきちんとし、芽が出なくても、市としてスポーツを続けてもらうということが必要。

今回、女子アイスホッケーがソチオリンピックに行くが、彼女たちの話を聞くと、皿洗いをしているという話も出てくる訳であり、所属していた企業がなくなり遠征費を自前で準備し、それをずっと乗り越えて、やっとソチオリンピックに出ることが決まる。それでオリンピックに出ることが決まったら、メディアも取り上げ、さも、ありがたい人達が出てきた、といった取り上げ方をしている。

ここは、僕は矛盾を感じるので、山田さんが仰ったように、最初からちゃんと支えること。そういう人達が支えられて、やっと成長した時に、心の中に、私たちは支えられた、恩返しをしたい、という空気を作らない限り、そういう好循環は生み出せない。

それはやはり、市として仕掛けづくりも、もちろん人材ということも含めて、目に見える形で、支援をするということをしなないといけないと思う。やはり明文化しないといけないし、そういう仕掛けや仕組みについて、市民が目に見えるようにしていかなければいけない。

もちろん、その次の世代の、憧れてやってみたいという子を育成するためにも、

またそのことが観戦文化や、さらに経済波及効果を生み出す意味でも、そこを明確に打ち出していくことが重要だと思う。

○霜觸会長

憧れやきっかけという意味で、日ハムさんが「200万人動員計画」というものを打ち出して、大々的に打って出ている。200万人の方々をスポーツのフィールドに引き込んでいくというパワーの凄さ、これはまさしくスポーツのきっかけづくり、動機付けになっていく。

この力があるというのは、日ハムさんならではのということであるが、これは、民間でできることは民間が行う、ということになっていくものだと思う。それも、非常に良い、スポーツに目を向けさせる、良いきっかけ作りになっていくのだと思う。

○三好委員

200万人というのは非常に高い目標なので、汲々としているところではあるが、目標を立ててやっているところである。

今、皆さんのお話を聞いていると、札幌は、他の都市と比べて恵まれていて、四季折々のスポーツが全てできる都市である。これは札幌ドームがあるということもあるが、そこでいくと理念は非常に良い理念で、会長も最初に言われていたとおり、内容も充実していて、非常にきめ細かくて良いのだが、一民間の会社の者から見ると、予算は大丈夫かと思う。どうしても収支というところを考えてしまう。

多分、それぞれの方針の下に施策があって、事業展開がある。ひとつひとつに収支を見ているのだと思うが、そういったところに、是非、民間を使っていくこと、行政、市民、点在する企業を巻き込んでいくことが必要。

先ほど山田さんも仰っていたが、育てていく部分について、なかなか行政がセンサーにはなれないと思うが、その接着剤にはなれると思うし、そういった機会を与えていくといったこともできると思う。

そういった意味でも、非常にきめ細かくて良いのだが、予算の方が心配である。少しでも抑えるところは抑えて、別なところに注ぎ込むという方が良いと思う。

○霜觸会長

これから議論がスタートするような感じであるが、今日はここまでとして、おまとめいただき、また次回としたい。

○二木局長

大変貴重なご意見をいただきありがたい。

この中で、計画として書き込めない部分がたくさんあると思う。特に、意見の中で、企業との連携をどうしていくかは大きな課題のように思う。また、市民自らが主体的に動くことの大切さというものは我々も痛感しており、それをどう引き込むか。情報の一方的な提供ではなく、双方向の提供をしていかないと、恐らく市民が動ける、動きやすいものにはなっていないと思う。その辺の工夫もしていかな

てはいけない。

書きぶりとしては、市民や企業との連携であったり、取組のあり方のところで表現をしていかななくてはならないかなという気がするので、その辺を修正させていただきながら、またご議論をいただきたい。

○霜觸会長

今回はこれくらいにして、次につなげていきたい。

(2) 報告

○事務局（石川企画事業課長）

（平成25年度スポーツ部予算の説明）

4 閉 会

以 上